

気候変動に関する専門家パネル第22回会合

2004年11月9日火曜日

第22回気候変動に関する政府間パネル会合(IPCC22)は、11月9日(火)にインド、ニューデリーにて開会した。午前中、開会の挨拶の後、参加者はIPCC21草案報告書を承認し、AR4への作業部会の貢献に関する進捗報告を聞き、午後にはオゾン層と地球気候系の保護に関する特別報告書や、二酸化炭素の補足や貯蔵に関する特別報告書、および国別温室効果ガス目録のための2006年度のIPCCガイドライン、影響および気候分析のためのデータ・シナリオ支援に関するタスクグループ(TGICA)等の最新状況の報告に耳を傾けた。また、AR4統合レポート(SYR)の範囲、内容、およびプロセスについての議論を開始した。アウトリーチおよびIPCCプログラム予算に関するコンタクトグループ会合も同時に行われた。

セッション開会

インド環境・森林省次官 Prodipto Ghosh は、IPCCによる国連気候変動枠組条約と京都議定書締約国と政策立案者全体に対するサービスを強調した。Pachauri IPCC議長は、IPCCは加盟各国の視点を尊重すると同時にそれぞれの加盟国がパネルの視点を尊重しなければならないと語るとともに、国際社会のアジェンダとともにタイミングについてのアウトプットの重要性と作業部会間でのさらなる強調と統合の必要性を強調した。

WMO事務局長 Michel Jarraud は、小島途上国のためのバルバドス計画10年目レビューを行うにあたって、国際会議の場である国連気候変動枠組条約のCOP-10と国連防災世界会議(WCDR)に対してIPCCが提供する科学的インプットの重要性を強調するとともに、IPCCの柔軟性によってその他の問題に取り組み、水に関する横断テーマが重要であると強く主張した。

UNEP事務局長 Klaus Töpfer は、IPCCが科学と政策の間の協調と融合として顕著なモデルであると述べ、気候変化を中心とするプロセス以上に、関連する政策プロセスのためにIPCCの作業は意義があると協調した。また、AR4はTARと比べ、女性や途上国からの執筆者が多いことに留意した。

UNFCCC SBSTA コーディネータ Halldór Thorgeirsson は、ロシア連邦の批准につづいて、2005年2月に京都議定書の発効が見込まれることに留意し、UNFCCC や WCDR の役割について言及しながら気候変化への適応支援の必要性を強調した。UNFCCC に対する IPCC 関連プロセスの重要性を指摘しつつ、気候モニタリング、温室効果ガス(GHG)報告ガイドラインの継続レビュー、ならびに土地利用、土地利用変化、森林に関する優れた実践方法ガイダンスに関する作業について振り返った。

インド森林・環境大臣 Thiru A. Raja は、AR4での研究成果が一般大衆に確実に伝えられることの重要性を強く主張し、とりわけAR4が途上国での研究にスポットを当てるとともに、排出量抑制のための取り組みと同じく、適応について焦点をあてることの重要性を強調した。

IPCC-21 報告書草案の承認

報告書 (IPCC-XXII/Doc.3) については、地球上の炭素貯蔵とそれに対する人類の影響に作用するプロセスについ

ての会合結果への干渉部分を明確にしたスイスにより修正が行われ、承認された。

進捗報告書

AR4 に対する作業部会の貢献: WG I: WGI 共同議長 Dahe Qin (中国)は、主幹執筆者(LA)や査読編集者(RE)が選出されたこと、2005年5月の報告書草案公開などに言及し、AR4(IPCC-XXII/Doc.9)に対するWG Iの貢献部分の完了に向けた進歩を強調した。また、WG Iは文書と情報に簡単にアクセスできる電子システムを整備したと述べた。

WG II: WGII 共同議長 Martin Parry (イギリス)は、WG II 報告書(IPCC-XXII/Doc.10)を紹介し、同作業部会が執筆者を選出し、地域的にバランスのとれた代表者と IPCC に今まで関わっていない新たな科学者の参加の必要を強調しつつ、タイムリーな報告書作成に向けて進行中であると述べた。また、今後の方策と、水問題を含む横断テーマの統合について概要を述べた。

WG III: WG III 報告書(IPCC-XXII/Doc.11)について言及しつつ、WGIII 共同議長 Ogunlade Davidson (シエラレオネ)は、同作業部会の AR4 チームに地域代表を増やそうと努力したと述べ、プロセスに加わった新しい執筆者を紹介した。適応と緩和および持続可能な開発の統合、および排出シナリオに関して行われる今後の会合について注意を呼びかけた。

イランは、作業部会草案の「0 オーダー」に向けたタイムテーブルが各作業部会の報告書完成を早めるために調整されるべきであると要請した。インドはWGIジャーナルのオンラインアクセスが他の作業部会にも拡大されるべきだと主張し、ジェンダーと地域性のバランスに関する詳細が各作業部会で同一カテゴリーを用いて報告されるべきだと提言した。

オーストリアは、情報の重要性和問題の機密性の高さを考慮し、プレナリーで排出シナリオに関する WG III 会合の結果を簡単に説明されるべきだと提案した。技術的な面で、政治的に微妙な問題は言及されるべきではないとスイスは強調した。

オゾン層と地球間システム保護に関する特別報告書:WG III 共同議長の Bert Metz(オランダ)が、本報告書(IPCC-XXII/Doc.13/Rev.1)について紹介し、報告書の該当範囲の変更を検討し、2005年4月までに完成させると述べた。

二酸化炭素の捕捉と貯蔵に関する特別報告書:WG III 共同議長の Metz は、この分野での新しい文献を十分に取り入れるため、本報告書の完成が2005年9月までにずれこむと述べた。(IPCC-XXII/Doc.14) 同共同議長は、実験的なレビュープロセスが執り行われ、そのプロセスでは、コメントへの対応において、客観性の向上を図るため、専門家レビューを匿名で行うことを指摘した。

オーストリアは、匿名のレビューを行う実験を支持したが、ロシア連邦はこれに反対した。Pachauri 議長は、この実験の成果は、順序どおりパネルで議論されることを指摘した。

2006年国別 GHG 目録のための IPCC ガイドライン: 国別 GHG 目録ラスクフォース(TFI)の共同議長、Thelma Krug(ブラジル)は、ガイドラインの5巻全てを網羅する5回の会合が開かれたと報告した。(IPCC-XXII/Doc.12) 同共同議長は、伐採木材製品に関する手法も含まれる可能性があるとして述べ、ガイドラインは、二酸化炭素排出量の報告における一貫性を改善するため、さらなるガイダンスを提供することを目指すと、指摘した。TFI 共同議長の Taka Hiraishi(日本)は、エアロゾル問題の複雑さと不確実性を指摘した上で、専門家会合の時機に関する別な見方に注目し、小規模専門家会合が2005年に開かれることを指摘した。(IPCC-XXII/Doc.16) ロシア連邦は、火山性のエアロゾルも取り上げるべきであると述べた。オーストリアは会合に国連欧州経済委員会の専門家を含めるべきだと述べた。(ロシア連邦は、火山性のエアロゾルも取り上げるべきであると述べた。重複箇所)スイスは、エアロゾルに関する作

業の継続を提案したが、UNFCCC プロセスで十分解決されていない問題について、手法をこれ以上論じることに疑問を呈し、SBSTA との協議を主張した。

TGICA: ; IPCC 事務局長の Renate Christ は、Secretary, introduced the progress report on the TGICA に関する進展報告書を照会し、その新しい権限に基づき 2004 年 9 月に開催された第一回会合の成果を強調した。(IPCC-XXII/Doc.15) 同事務局長は、出席者が、新しい一般循環モデル(GCM)アーカイブへのアクセスを容易にすること、キャパシティビルディング(能力向上)、そして社会経済的データなど、いくつかの問題を考察したと指摘した。オランダは、TGICA データセットから生じる成果が「IPCC データ」と誤解されることへの警告を発した。

AR4 SYR の範囲、内容、プロセス

Pachauri 議長は、AR4 SYR に関する提案 (IPCC-XXII/Doc.5)の概要を述べ、そのような報告書の必要性を説明し、約30頁の長さ限定するとの提案を強調し、提案されている執筆者チームは、各WGから4-6名ずつで構成され、IPCC 議長が、各WG共同議長と相談の上、選抜したものとすると説明した。IPCC 事務局長の Christ は、二つの可能な締切日を紹介し、どちらのオプションも IPCC-XIX/決定書 6 を考慮しており、SYR は 2007 年の第四四半期に完成されなければならないことを指摘した。

WG I テクニカル・サポート・ユニット(TSU)の Martin Manning (米国)は、AR4 SYR の事前コピーを 2007 年 11 月の UNFCCC COP-13 に提出するという締切日提案に懸念を表明した。同氏は、他の数人の支持を得て、タイミングに関する決定を延期するよう促した。オーストリアは、期限の決定では SYR 執筆者チームと相談するべきであると示唆した。

ニュージーランドは、オーストリア、モロッコ、スーダン、英国、オーストラリアその他とともに、AR4 SYR の作成を支持した。同氏は、SYR の運営、範囲、タイミングに関する合意の必要性を強調した。米国は、IPCC-19 での議論を想起し、SYR ではトピックと疑問点とを取り上げるかどうか質問した。同氏は、WG 報告書の承認前に SYR の草案を作成することに関係する問題の可能性を指摘した。これに対し、Pachauri 議長は、IPCC-19 では、疑問よりもトピックについてであるとの一般合意があると指摘したが、この問題は本質的なものではないだろうとのべた。

フランスは、AR4 SYR では、TAR SYR での疑問点が応えられたかどうか、再検討するべきだと提案した。スイスは、AR4 SYR では TAR 以後わかったことを提示するべきだと述べた。

多くの発言者が、SYR の質を犠牲にして、COP-13 に間に合わせるよう仕上げるべきではないことを、強調した。WG III 共同議長の Davidson は、質は定められたパラメーターであることを強調し、英国およびブラジルとともに、成果を政策立案者に提供するため、COP-13 までに報告書を完成することの重要性を強調した。ドイツは、IPCC の「主なお客」が UNFCCC であることを指摘し、SYR は、COP-13 前に完成させなければならないと述べた。英国は、COP-13 までに SYR がないとなると、「後ろ向き的一步」を示すものであり、IPCC を「無意味」と見る向きも出てくると述べた。ブラジルは、タイミングが質に影響すると仮定する必要はないことを指摘した。

イタリアは、SYR が WG の作業に付加価値をつけるものであるべきで、クロスカuttingな要素に関し統合されたビジョンを与え、焦点を当てるべきだと述べた。ノルウェーは、より広範な聴衆が容易にアクセスできるような文章を作成するため、コミュニケーションの専門家を雇うことを支持した。AR4 SYR に関する議論は、水曜日のプレナリーでも続けられる。

コンタクトグループ

アウトリーチ・タスク・グループ: アウトリーチ・タスク・グループの共同議長である John Stone (カナダ)は、事務局が準備した、IPCC や、その歴史、会員、手続き、活動を紹介するファクトシートを考察するようグループに求めた。出席者はそ

の有用性を認め、シート作成のプロセスについて議論し、それを国連の6つの公用語にすることを提案した。気候変化や小島嶼諸国に関し、IPCC-21で提案されたファクトシートについて、参加者は、異なる作成プロセスが必要であることへの懸念を表明し、一部の出席者は、シートを短いテクニカルペーパーとして扱うべきであることを提案した。タスク・グループは、木曜日に再度会合し、オゾン層と地球気候システムを保護することに関する特別報告書、および二酸化炭素の捕捉と貯蔵に関する特別報告書、そしてAR4.1についてのアウトリーチを議論する。

資金調達タスクフォース: このタスクフォースの共同議長である Marc Gillet (フランス)は、2005-8年度でのIPCCプログラムと予算に関するコメントを求めた。(IPCC-XXII/Doc.4/Rev.1) 出席者は、年間歳出額を一定とするとの提案の利点と欠点について議論し、IPCCは多年度プログラムであることから、そのような措置の影響に関する詳細内容を求めた。IPCC作業プログラムの進展を図るため、一部の出席者は、AR4発行に必要な資金供与分を2007年以前に徴収すべきであることを強調した。これらの出席者は、一部活動での費用歳出の余剰分で、過剰歳出分を補うことが可能であるかどうか、質問した。また、これら出席者は、2005年のIPCC-23の期間とコストに関する多様なオプションを取り上げた。出席者は、歳出と資金供与の見通しについて文書化するよう提案した。3つのWG TSUsは、その予算で見込まれる調整について概要を示した。タスクフォースは、水曜日に再度会合する。

廊下にて

オフィシャルによるランプ点灯セレモニーが会合の開会を記念したが、このセッションの中心議題は、AR4統合報告書の作成であるというのが広範な見方である。この問題では、干渉に事欠かなかったが、一部の出席者は、報告書の作成に目に見える支持があったことで、楽観的な見方を表明し、残りのセッションは、スムーズにいくと予想した。他の出席者は、内容についての合意が欠けると見て、質をあまり強調しすぎると、技術的過ぎる報告書になりかねないと警告するものもいた。